

2017年7月より、前川亨先生から専修大学法学研究所事務局長を引き継ぎ、今期は渡邊が事務局長を務めることとなりました。伝統ある研究所の事務責任者の役職を担うに当たっては、これまでの研究所活動の伝統を引き継ぎ、所員、客員所員の先生方をはじめ、皆さまのご指導を仰ぎながら、実直に研究所の活動を進めていきたいと考えております。何卒、よろしく願い申し上げます。

今回お届けする56号では、川上洋平先生にご寄稿いただきましたご論文「啓蒙と政治——カント、ハーバーマス、フーコー」とともに、2017年9月より順次開催しました学生と市民のための公開講座「現場からの法律学・政治学」の第2シリーズの成果を掲載しております。

川上論文では、カントが提起した「啓蒙」の問題について、偉大な3人の思想家の考えを分析しつつ、「啓蒙というものの現代的な位相」について向き合うことが主題とされております。本研究所の活動は、現代社会における個別具体的な社会問題への対応に関心が向かいがちですが、「人類の永遠的価値」への探求に取り組む川上論文については、今後、本研究所の活動内容や研究方法などを検討していくに際し、短期的、場当たりの対応を戒め、国家・社会との本質的な向き合いへの導きの役割を果たす、極めて重厚なご研究であると思われまします。ご多忙のなか、ご論文をお寄せいただきました川上先生には、厚く御礼申し上げます。

また、昨年度より法学研究所が主催している公開講座「現場からの法学・政治学」につきましては、本年度も、研究と実務の交流を通じた社会問題の解決を模索するための企画として、3つのテーマを取り上げ、「現場」の実務家からお話しをうかがい、それを受けて本学研究者とフロアからの参加者が質疑応答を通じて問題と向き合う機会を設けました。ご多忙のなか、企画趣旨に賛同して下さり、寸暇を割いてご講演下さり、フロアからの質問にも丁寧にご対応下さった角谷亮様、内野桂子様、田口寿子様には、改めまして、心より御礼申し上げます。また、本年度も、公開講座の実施に当たっては、森川幸一先生、鈴木潔先生にコーディネートのお力をいただきました。ご協力いただいた先生方にも、改めまして、厚く御礼申し上げます。「現場からの法学・政治学」に関しては、2018年に最終回となる第3シリーズを開催する予定であり、現在企画を鋭意検討中でございます。こちらについても、ご期待いただきたく存じます。

その他、法学研究所の活動としましては、2018年2月3日に、専修大学法学研究所設立50周年記念シンポジウム「対話する国家・社会へ」が盛大に開催されました。こちらの成果については、次号において公表する予定であります。

なお、本号が無事に公刊に至りましたのは、ひとえに前川亨所長が献身的に原稿のとりまとめを行ってくださったお陰であります。また、前号より印刷・編集をお願いしております尚学社の吉田俊吾氏にも、多大なるご尽力を賜りました。献身的なご支援を賜りましたお二方に対し、心より御礼申し上げます。

渡邊一弘(法学研究所事務局長)